
ポケモンヒストリー

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンヒストリー

【Nコード】

N6645Z

【作者名】

名無し

【あらすじ】

さまざまな地方を巡り歩いてきたサトシは、その実力を買われ、なんとカントー最強のトレーナー・ワタルへの挑戦権を得る！しかし、世界は広がった……。もつと強くなりたいと闘志を燃やすサトシは、初心に戻るため再び各地方への旅を開始する！

熱いバトル、さまざまな陰謀、そして恋……。はたして、彼の旅に待ち受けるものとは！？

キャラ紹介

サトシ 17歳

「気合い」と「根性」でできた若きポケモントレーナー。相棒はずつとピカチュウ。そして夢もずつとポケモンマスター。

そんな彼も成長し、トレーナーとしての実力は今やカントーでは1、2を争う程に。しかし、調子に乗りやすい所や無鉄砲さなどは変わらず、精神面の成長はあまり見られない……………と思いきや、可愛い女の子を前にするとたま〜に赤面することも。でも周りとは比べるとやはりまだまだ鈍感。

ハルカ 17歳

「ホウエンの舞姫」の二つ名を持つ。コーディネーターとしての実力はもはやトップクラス。

当然外見も成長し、だんだん「可愛い」から「綺麗」になってきた。何とファンクラブまでできたとか。内面的にもすっかり大人……………になった訳ではなく、同年代のヒカリや弟のマサトにまでいいようにからかわれるなど、「大人の女性」までの道のりはまだまだ遠い（笑）。

最近はコンテストどころか、周りを完全シャットアウトして猛特訓しているらしい。

タケシ 21歳

ポケモンブリーダーにしてニビシティジムリーダー。その幅広い知識でサトシ達をかげながら支える。皆のお兄さんの存在。しかし「

お姉さああああん！！！」なのは今でも変わらない……。

カスミ 19歳

自称「世界の美少女水ポケモンマスター（長つ）」。水ポケモンをこよなく愛するハナダシティジムリーダー。軽そうなイメージとは裏腹にジムリーダーとしては誰もが一目置く存在。

サトシだけでなく、ハルカやヒカリにもよく相談を受けるなど皆に頼られている。タケシがお兄さんなら、彼女は皆のお姉さん役と言ったところ（？）

マサト 14歳

ハルカの実弟。相変わらず生意気だが、彼ももう立派なトレーナーに。尊敬する父の様なジムリーダーになるべく、今は修行のため各地方へ旅に出ている。

姉であるハルカのことは気にかけていない様に見せてても実はお姉ちゃん子だったり（多分）。

ヒカリ 17歳

今をときめく「シンオウの妖精」。その人気はもはやアイドル並。同じコーディネーターであるハルカのことは良き友人兼好敵手として今でも慕っている。

超おしゃれ好きで人懐こく、今で言う「守ってやりてえ」タイプ。でもカスミと一緒にサトシやハルカをからかうなど、以外と人を扱うのが上手いところも（良い意味だよ？）。

同じくライバルであるノゾミと共にトップコーディネーターを目指し精進中。

キャラ紹介（後書き）

若干アニメと設定が違つかもしてません。ご了承ください……。

旅立ちと始まり（前書き）

作者はサトハル、シュウハルがすぎです。
苦手な方はご注意を。

旅立ちと始まり

夜……

とある地方のとある街の高いビル……

「……………」

その屋上から街を見下ろす人物が一人……………」

黒いローブを纏い、表情も頭からすっぽりかぶったフードで見えない。

まさしく……………漆黒……………」

夜空に浮かぶ月の光が無ければ、その姿は夜の闇に完全に紛れていただろう……………」

「……………」

バタバタ……………」

夜風がローブを撫でる……………」

その漆黒の人物はただただ、摩天楼の上から眼下に広がる街を見下ろしていた……………」

サトシ「じゃ、行つてきます!」

ハナコ「まったく忙しないわね……。もう少しゆっくりしていけばいいのに……」

サトシ「そんなじつとしてらんないよ!俺はもっと……もっと強くなるんだ!」

ピカチュウ「ピカチュウッ!」

帽子の少年「……サトシの肩に乗るピカチュウが「同じく!」と言わんばかりに鳴く。

ハナコ「ホント、あんたはソレばかりね……」

サトシ「何だよ母さん。もっと明るく見送ってくれよ……。愛しい息子の決意の朝なんだぜ?」

サトシが少し冗談気味に言う。

マサラタウンの一般家庭のごく普通の光景。

ハナコ「ハイハイ。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい。身体は大事にね?」

サトシ「おう!行つてきます!」

遠ざかつていく息子の背中を見る……。もう何度こうやって送ったことが……

でももうあの子も17……。ずいぶんたくましくなったわね……

……。ハナコはその背中が点に見えるほど小さくなるまで見つめ、やがて家に入ってしまった。

サトシ「うゝん。ちょっと早すぎたかなあ……………」
ピカチュウ「ピカ……………」

ハナダシティの駅の西口。

サトシはある人物達と待ち合わせしていた。

時計を見る。待ち合わせ時間15分前。サトシにしては早い。

しっかし変わったなあハナダシティも……………」

いわゆる高層化。もともとそんなに田舎町というわけではなかったが、10歳のころ自分が初めて訪れた時と比べれば、高層ビルやらなにやらが多くなっていた。

サトシ「この駅も昔は小さ……………」 あっ！おゝいカスミいゝ！！」

向こうからオレンジ色の髪の少女が歩いてくる。

カスミ「ちょっと！そんな大きな声出さないでよ！恥ずかしいじゃない！」

サトシ「いやだって、こんな広いところくらいじゃなきゃ聞こえないだろ？……………」 いやあゝでも久しぶりだなあカスミ！ちょっとは女らしくなったんじゃない？」

カスミ「へえゝ？あんたも少しは成長したじゃない。このアタシの魅力にちよつとは気がついたなんて。」

サトシ「まあ、だって元がアレじゃあさ……………」 ってウソウソ、ジョーダン……………」 ソレ当たったら怪我……………」

カスミが近くの小石を拾おうとしたので、サトシは続きを言うのをやめた。

カスミ「まったく……………ん？あれタケシじゃない？」

サトシ「あ、ホントだ！おゝいタケシイイ！！こつちだこつち！！」

タケシ「おお二人とも！久しぶりだなあ！」

細目の男。タケシの登場だ。

サトシ「久しぶりだなタケシ！どうだ？彼女できたか？」

冗談気味に言うサトシ……………が

タケシ「サ、サササササトシが……………彼女って……………言っ
た……………！？」

サトシ「何だよ、そんなびつくりすんなよ！冗談だつて！」

タケシ「サトシからその部類の冗談が出るとはな……………。この六
年あまりの月日は伊達じゃないってことか……………」

カスミ「アタシもちよゝとだけビックリしたわ。でも行動が突飛
なところは変わらないわね……………」

タケシ「だな。いきなり「初心に戻りたいから最初のメンバーで旅
しよう」だなんて…………。まったく人のこと考えてるのかよ。」

サトシ「ハハハ。でも二人とも来てくれたじゃん。やっぱ仲間だよ
なあゝ俺たち！」

サトシは数日前、かのカントー最強のトレーナー、ドラゴン使いの
ワタルとバトルした。

何故そんな変則マッチが実現したかと言うと、

カントーリーグ協会がサトシの有望性を買ひ、何とポケモンリーグ、
四天王リーグともにすっ飛ばし、特別にワタルへの挑戦権を与えた
のだった。

だが結果は……………完敗。

何とか三体を戦闘不能に追い込んだものの……、最後はワタルのカイリユ―相手に手も足も出ず、ストレート負け。その圧倒的な力の差にサトシは啞然としたが、

ワタル「君の再挑戦を心から待っている……………」

その言葉でサトシは吹っ切れた。

……………世界は広い……………俺はまだまだ強くなれる……………

……………！！

というわけで初心に戻り、一番最初に旅をしたメンバーで旅をしようというのだ。

サトシ「まっ！回るのはカントーだけだからさ！それまでの間つきあってくれよ！」

ピカチュウ「ピッカチュウ〜！」

ピカチュウが「ごめんね〜」と言わんばかりに可愛らしく鳴く。

カスミ「しょうがないわね。可愛いピカチュウに免じて、つきあってやるわ！」

タケシ「まあ俺たちにとっても、ためになるかもしれないしな。ブリーダー修行の旅、再開だ！」

サトシ「そうこなくちゃ！よろしくな二人とも！！」

バンバン！と二人の肩を叩くサトシ。

カスミ「っタ！もうちょつと加減しなさいよ〜！……………で、カントー！回った後はどうすんの？」

サトシ「う〜ん、まだ決めてない。ホウエンにでも行ってみようかなあ〜……………」

カスミ「あら？ ジョウトすっ飛ばしてハウエンなんて……………喜ぶわよ？ 愛しのハルカア。」

さっきの仕返しと言わんばかりにカスミが冗談気味に言う。

サトシ「いつ、愛しつ……………！ ちげー！ よ！ 別に会いに行くだけで旅に誘おうとしてた訳じゃ……………」

カスミ「ほあう、会いに行くつもりだったんだあ。」

サトシ「だ、だから違つ……………！ ちよつと世話になったから顔出しとこうと思っただけだって！ ！」

カスミ「そーやって必死になってんのが怪しいのよ。 ってか顔真つ赤よあ？ ？」

サトシはもうしどろもどろ。

でもこーいう冗談が通じる様になったんだからすごい成長よね。

サトシ「ツツツ！ ああもつ！ さつさと行くぞ！ ？」

ズカズカと進んで行くサトシ。

カスミ「ちよつ、行くってどこ行くのよ！ ！」

タケシ「逃げたか。」

カスミ「も、面白かったのに……………」

タケシ「……………そういうお前はどうかんだ？ ！」

と今度は、タケシがカスミ同様、にやけながら言う……………
……………が

カスミ「フフフ。 ヒ・ミ・ツ！ ！」

タケシ「なつ……………何い！ ？」

思いがけないカスミの返答に驚くタケシ。
じよ、冗談のつもりで言ったのに……………

カスミ「ハイハイ、この話はここまで。さっ、サトシ追いかけてしましょ？このままじゃアイツ迷子になるから。」

そう言っつてサトシを追いかけるカスミ。

タケシはそんな彼女の背を見る……………

タケシ「……………こりゃ、俺たちもつかうかしてられないな。サトシよ。」

静かに呟くタケシであつた。

カントー地方。どこかの街のビルの地下……………

「……………状況は？」

低い。地獄の底から響いてくるかの様な声。

部下？「はっ！先程、監視の者から入った連絡によりますと、ター

ゲットは今朝マサラタウンを出発。現在はハナダシティ駅にてトリーナーと思われる仲間二名と合流したとの事です！」

部下と思われる男が軍隊じみた口調で報告を上げる。

???「仲間というのは？」

部下1「はっ！ニビシティジムリーダー・タケシ、ハナダシティジムリーダー・カスミと思われます！」

???「なるほど。昔のメンツと言うわけか……。監視を続ける。動くのは奴らに隙ができた時だ。その際、他の者は適当に追っ払っておけ。目的はあくまでサトシ君のみだからな。」

部下1「はっ！では引き続き監視の伝令を送ります！」

???「よし。お前はもう下がれ。次の報告を。」

するともう一人の部下が前へ出て、先程の部下と同様に軍隊口調で部下2「はっ！解析は現在35%完了。このペースでいきますと10日後には完了する予定です。」

???「思ったよりかかっているな。急げ。」

部下2「はっ！すぐに伝令を！」

ボタン……………部下達が扉を閉める音……………

もう部屋にはボスと思われる男一人しかいない。

……………少し手間取ったものの、こちらは近い内にメドがつくだろう……………

……………後は……………

???「……………『ワダツミ』……………か……………」

数日後……………町外れの芝生……………

タケシ「ブースター、戦闘不能！よって勝者、サトシ！」

サトシ「いよっしゃああああ！！大勝利だぜえええええ！！」

カスミ「つつつつつつさいわね……………」

カントーを回り始めて数日。

サトシはカスミ、タケシと共に相変わらずバトルの日々を送っていた。

そして今日の草試合も見事勝利をおさめた。

トレーナー「ちえ。やっぱり強いなサトシさんは。」

試合相手の少年がブースターをボールに戻しながら言う。

サトシ「いやあ、俺なんてまだまださ。ワタルさんのカイリューに軽くあしらわれちゃったし。」

トレーナー「でもあのワタルさん相手にあそこまで戦えたんだ。十分強いよ。」

サトシ「そう？ま、まあ悪い気はしねえなあ、ハハハ！」

カスミ「すぐ調子乗んだから……………」

サトシとワタルの変則マッチの様子は全国にTV中継されていたので、多くの人がその戦いを見ていた。

同時にサトシの名も自動的に広まって、今ではちょっとした有名人

だ。

タケシ「そろそろポケモンセンターに行った方が良さだろう。ポケモン達も疲れてる。」

サトシ「ああ、そうだな。」

タマムシシティに着いたサトシ達はまっすぐポケモンセンターへ直行、ポケモン達をあずけた。

タケシ「ジョーイーさあああつ……あでっ！ででで！？」

カスミ「アンタは変わってないわよねほんっつと！」

すぐにカスミに耳を引っ張られるタケシ……

タケシ「ちょっ……まだ名前呼んだだけっ………！」

懐かしいなあ………

などとサトシは呆れながらそれを見ていたが、

ジョーイ「マサラタウンのサトシさん。フタバタウンのヒカリさんから伝言を預かっています。ソノオタウンのポケモンセンターに連絡が欲しいそうです。」

サトシ「ヒカリが？はい。わかりました。」

カスミ「ヒカリ？前にシンオウと一緒に旅してたっていう子？」

またもやカスミがニヤニヤしながら言う。

サトシ「まゝたそれだよ……。ヒカリは友達！仲間だよ！」

カスミ「じゃあハル力は？」

サトシ「ハルカも同じだ！……と、とにかく、ヒカリに電話しないと

……」

そう言ってTV電話のもとへ向かうサトシ。

カスミ「ふう〜ん……（ニヤリ）」

カスミは見逃さなかった。

ハルカの事を聞かれた時と、ヒカリの事を聞かれた時の、サトシの微妙な反応の差を………

旅立ちと始まり（後書き）

初めての投稿です！

どこまでやれるかわかりませんが頑張ります。

嵐の前の静けさ？

タマムシシティ・ポケモンセンター。

午後5時。

サトシ「よおヒカリ！久しぶりだなあ！」

ヒカリ「サトシ久しぶり〜！元気してた？」

サトシはジョーイからの伝言を受け、TV電話でヒカリに電話していた。

ヒカリ「タケシも久しぶりね！……あ！もしかしてあなたがカスミさん！？わたしヒカリです！よろしくね！」

カスミ「よ、よろしく！」

ヒカリの勢いに珍しくカスミは押され気味だ。

ヒカリ「でもカスミさんって噂どおり美人ねえ〜！しかもジムリーダーだなんて！女として憧れちゃう！」

その言葉にカスミはもうニヤニヤ。

カスミ「そ、それほどでもお〜！ヒカリっていい子じゃないサトシ〜！」

サトシ「すぐ調子乗るのはどっちだよ………」

カスミ「何か言った？」

サトシ「や、何も〜。ところでヒカリ、俺に何か用か？」

サトシは今の空気が面倒くさいのでさっさと本題に入った。

ヒカリ「あ！そうそう！最近ハルカと連絡取れないんだけど、サトシ何か知ってる？」

サトシ「え？ハルカ？いや、特に何も聞いてないけど……えっ、連絡つかないのか？」

ヒカリ「そうなのよ。私が連絡したのは三日前くらいんだけど、それからいくら電話かけても出ないのよ。」

サトシ「ふん……。カスミ何か聞いてるか？」

カスミ「いいえ、別に何も聞いてないけど……」

サトシ「タケシは？」

タケシ「いや、俺も別に……」

サトシ「……まっ、あいつのことだ。ケータイの電源消しっぱとかなんじゃねえの？それかどっかに落としてるとか。」

カスミ「サトシの中のハルカはよっぽどドジなイメージのね……」

ヒカリ「そっか……。わかったわ。とりあえずまた連絡してみる。突然ごめんね。」

ハルカを心配してか、さっきまでの勢いがすっかり無くなってしまったヒカリ。

さすがにサトシもすぐにフォローする。

サトシ「ま、まあそんな心配すんなって。後で俺がマサトあたりに電話して聞いてみるから。」

ヒカリ「ホント！？ありがとうサトシ！わたし、よく考えてみたらハルカの身内の番号知らないから……。でも良かったわ！何かわかったら教えてね！」

サトシ「ああ、すぐ連絡するよ。」

ペア……と、突然明るくなるヒカリ。

ホント表情豊かだよなヒカリは……

お前は笑顔が一番……………って！何考えてんだ俺！？
ともあれとりあえず元気になったヒカリを見て安心したサトシは、
しばらく雑談を楽しんだ。

ピッ……………TV電話の電源を切る。

ヒカリ「…ふう……………」

ノゾミ「どうだった？」

ヒカリ「うん……………サトシ達も何も聞いてないって……………」
ノゾミ「そう……………」

さっき電話では元気に話していたものの、ヒカリはやはりハルカが
心配だった。話している間は気がまぎれていたのだろう。

ノゾミ「どうしたんだろうね？最近コンテストにも全然出てないみ
たいだし……………」
ヒカリ「うん……………」

ハルカが最近コンテストに出ていない事は、サトシには言わなかつ
た。

そこまでは……………何だか言いづらかったからだ。

……………わたし……………ミクリカップ以来、ハルカに一度も勝ったことな
いの……………」

でも……………ハルカがいなくなれば……………楽になる……………？
前に見たコーディネーターの雑誌にそんな事が書いてあった。

「ホウエンの舞姫、戦線離脱！？シンオウの妖精、障害が無くなり
一歩リードか！？」

勝手なこと書かないでよ……………
だからこそ……………越えたいのに……………

ノゾミ「ハルカにミクリカップのリベンジしたいんだけどな……………」

…」

ヒカリ「うん……………」

……………でも、大丈夫だよ。サトシもマサト君に聞いてくれるって言うてたし。きっと何か事情があるんだよね。

ヒカリは無理やり気分を切り替えた。

ヒカリ「ハルカなら大丈夫！きっと何か事情があるのよ！」

ノゾミはいきなりヒカリの勢いが戻ったので多少びっくりしたが、すぐに不敵に笑い返した。

ノゾミ「そうだね。それにいつまでも引きずってたら、明日のコンテストにも影響が出る。」

ヒカリ「うん！明日こそ負けないからねノゾミ！」

ノゾミ「その息だよヒカリ。でもまさかアンタに励まされるなんてねえ。」

ヒカリ「ちょっとソレどういう意味よ！？」

ソノオタウンのポケモンセンターに、二人の元気な声が響いた。

午後9時30分。

タマムシシティ・タマムシ美術館

美術館付近……………

???「目標に到達。指示を。」

ピピガガッ……………通信機器の音……………

???「よし、では各管理コンピューターにハッキング。完了次第報告せよ。」

???「了解。では、ハッキングを開始します。」

ガチャガチャと色んな機器をリユックから取り出す。と同時に、ものすごいスピードでそれらを操作し始める。

風もない静かな夜……………嵐の前の静けさというものだろうか……………

サトシ「修行?」

マサト「うん。3ヶ月くらい前だったかな?「自分とポケモンの力を高めるために修行するから、しばらく連絡取れなくなる」っていきなり電話きてさ。まあサトシがよくやる山籠もりみたいなものなのかな?」

サトシ「にしてもずいぶん長いな……………」

サトシはさつきヒカリに言った通り、ハルカの事を聞くためマサトに連絡していた。

マサトは今はポケモントレーナーとして各地方をまわっており、今はジョウトにいるらしい。

マサト「それでしばらくコンテストにも出れないって言ってたけど、まあそういう事だから。うちの姉が心配かけたねえ。」

相変わらず皮肉いっぱいマサトは言う。

サトシ「ハハハ。まあ別にそんな心配はしてなかったけどな！」

マサト「あら、お姉ちゃんかわいそうに……」

マサトは何やらニヤニヤしている。

サトシ「ま、まあちょっとは心配したかなあ、ハハ……。じゃあありがとなマサト！ジム戦がんばれよ！」

と言いつつ内心では結構心配してたサトシ。
これでひとまず安心だな。

マサト「うん！サトシになんてすぐ追いつくからね！」
サトシ「ったく成長しても生意気い……。じゃなっ！」

ピッ！携帯の電源を切る。

タケシ「何かわかったか？」

サトシ「ああ、何か修行だってさ。」

カスミ「修行？」

サトシはさっきマサトから聞いた事をタケシ達にも話した。

タケシ「コンテストにも出ないで特訓だなんて……………随分な力の入れようだな……………」

カスミ「しかも完全にまわりシャットアウトして3ヶ月も……………どっかの誰かさんに似て行動が突飛ね。」

カスミがサトシを横目で見ながらわざとらしく言う。

サトシ「おいソレ俺に言ってるのか？」

カスミ「他に誰がいのよ。」

カスミの即答にふてくされた様な顔をするサトシ……………が
……………へっ。いっちょ前に張り切りやがって……………

サトシ「つつおーーし！！俺も負けてらんねええええ！！ちょっと外行ってくる！」

カスミ「えっ！？外って何、ドコ！？」

サトシ「修行だよ修行！大丈夫すぐ帰ってくるから！じゃなっ！」

そう言っサトシはポケモンセンターから飛び出して行ってしまった……………。

カスミ「ちょっと……………！ヒカリに連絡するんじゃない？もっ行っちゃったし……………」

タケシ「ハハハ……………。まあヒカリには俺達で連絡しておこう。」

カスミ「そうね……………にしてもホンツツト似た者同士……………」
……………。

夜のタマムシシティに消えていった少年の背中にため息をつくカス

ミであつた…………。

午前1時

タマムシシティ……………どこかのビルの屋上……………

???「……………」

月も星も雲により身を潜めた夜の闇は、やはり漆黒のロープを纏つたその姿を完全に呑み込んでいた……………
眼下に見下ろすはタマムシ美術館。
そして……………

サトシ「ふう〜。けっこー遅くなっちゃったなあ。散歩がてらそろそろ帰るかピカチュウ」

ピカチュウ「ピッカッチュウ！」

肩に黄色いポケモンを乗せて歩く少年……………

???「……………」

闇に紛れた「闇」は、ただただその少年を見つめていた……………

タマムシ美術館付近。

???「ハッキング及び突入準備完了。いつでもいけます。」
???「……………よし、ここからもよく見える。」

先ほど出されていた電子機器の数々はすでに片付けられている。

???「では作戦及び目標の再確認を……………」
???「リーダー。それは必要ありません。時間の無駄です。」

リーダーと呼ばれた男の言葉を遮り、同時に上司に対しては有り得ないであろう言葉を放つ……………が

リーダー?「フツ……………そうだったな。お前は何よりも無駄を嫌うエンジニア。そして……………」

???「どんな任務も無駄なく達成してみせます。」

またもやリーダーの言葉を遮る。

リーダー?「頼もしいな。では、コードネーム『ルカ』……………」

瞬間、雲が割れ、月光がさす。

リーダー?「……………突入せよ。」
ルカ「了解。」

ピッ……………

リーダー?「ボス、『ルカ』が目標に突入しました。」

???「そうか。ご苦労。お前はもう戻れ。」

リーダー?「はっ。」

どこかの街のどこかの地下……………

現在は部下もおらず、部屋にいるのは「ボス」と呼ばれた彼一人だ。
……………『ルカ』に任せておけば、まず間違いなくアレは手に入るだろう……………

残る鍵は……………

「……『シド』。」

シド「はっ。」

「『水の民』の搜索を開始しろ。」

シド「はっ。ただちに。」

ピッ……通信機器を切る。

ガサツ……机にあった古い文献を手取る。

そこに描かれているのは、

「龍」を思わせる体躯をした生物。

「……必ず……手に入れる……」

思わず声に出る。それほどまでに手中に収めたい存在。

コンコン。ドアをノックする音……

「……入れ。」

ガチャ……ドアが開く。

部下「失礼します。個体02に関する解析について報告いたします。」

男の表情が、期待のソレに変わる。

「……聞こう。」

部下「……解析は100%完了。いつでも適合実験に移行可能です。」

「……そうか。」

男の表情が、不敵な笑みに変わる。

「???」「ただちに開始しろ。」

部下「はっ!」

部下が立ち去ろうとする……………が

「???」「お前はと思う。私がこの力を手に入れたとき、私はどのような存在になっていると思う。」

突然の言葉に多少戸惑った部下だったが、すぐに表情を戻し答えた。

部下「……………神……………に等しい存在に。」

男の表情が、凶悪な笑みに変わる。

ボタン……………ドアが閉まる音。

今度こそ部下が出て行き、再び部屋には男一人となった。

だが……………その笑みはいまだ浮かべたまま……………

もうすぐ……………もうすぐだ……………

主人の周りの空気が激変したのに気づき、傍らのペルシアンが顔を上げる。

どこかのマフィアのボスのような出で立ち。

その主人の左胸には「R」のバッジ。

そして、もはや狂気とも言える表情で、言い放つ。

サカキ「……………私は……………神となる……………!!」

嵐の前の静けさ？（後書き）

サトハル出てくるの結構後になるかも……
けど、必ず出しますんで！

遭遇！バカにされた？

サトシ「ふあゝ…、流石に眠くなってきたな……。」

夜もふけてきたので、サトシはバトルの訓練を切り上げ、ついでに散歩をしながらポケモンセンターへ向かっていた。

サトシ「今何時……げっ、もう1時回ってんじゃん。やりすぎた……。」

流石にこの時間だと肌寒い。散歩をやめ、サトシは身震いしながらポケモンセンターに急ぐ。

サトシ（そういやアイツ……一人で修行してるんだっけ。今頃何やってんのかな……って、もう流石に寝てるか。）

歩きながら空をしてみる。月も星も見えない。

……いきなり一人でジョウトに行くって言い出した時は、正直びっくりしたな……。

あの頃は俺だってまだ一人旅なんてしたことなかったのに……
…しかもアイツ女の子だし。ちよっと焦ったっけなあゝ……。

などと考えて歩いている内に大きなタマムシ美術館が見えてきた。

サトシ「美術館か。昔の俺ならあんま気にしなかっただろうけど……、明日にでも寄ってみるかな？」

美術館の前を通りすぎる……と思ったのだが、

サトシ「……………ん？」

ふと見ると、夜の美術館に入口から人が一人入っていくのが見えた。こんな時間に……………てか、まだ開いてたのか美術館。好奇心には勝てず、ついさっきまでポケモンセンターへ向かっていたはずの彼の足は、自然と美術館に向かっていた。

サトシ「……………流石に夜中だけあってちよいと不気味だな……………」

ホールを見渡す。

シン「……………と静まり返り、人っ子一人いない。」

サトシ「夜の美術館って結構定番のシチュエーションだよな。」

ちよっと肝試し気分で歩を進める。

カッコーン……………コッコーン……………

聞こえるのは自分の足音のみ。

よくわからない絵やら銅像やら、ポケモンの化石みたいのやらが沢山展示してある。

てかこれって不法侵入？いや、だって入口開いてたし……………誰にも見つかってないし……………大丈夫だよな？

全然ダイジョバナイのだが、残念ながら彼の常識の中では大丈夫らしい。

しかし、そんなサトシはふと疑問に思った。

サトシ「……………誰にも……………見つかってない？」

いや……………見つける側の人がない？

ここまで割と色んな場所に行ったが、それまでの間人という人を見

ていない。

サトシ「警備員とかいないのか……………？いや、そんなことないよな……………」

そついや入り口にも見張りとかいなかったな……………見たとい
つたらさつき入口から入っていった人……………

サトシ「……………！」

そこまで考えてやっと思い至った。

まさか……………！？

そつ思った瞬間、彼の視界に人影らしきものが入った。ただし……………

……………

サトシ「なっ……………だ、大丈夫ですか！？」

部屋の隅に、警備員らしき人物が倒れていた。

呼んでもゆすつても反応がない。気絶しているようだ。

サトシ「くっ……………！とりあえず救急車と警察を……………」

今が異常事態であることに気づいたサトシは自分の携帯に手を伸ば
す……………が

サトシ「……………何で！？何でつながらないんだよ！？」

焦りとイラつきで思わず叫ぶ。何故か携帯がつかない。
ちくしょう……………！だから誰もいなかったのかよ！？

恐らくいなかったのではなく、見なかった。ここにいる警備員と同じく、皆気絶させられ、どこかへおいやられているのだ。

この分だと、監視カメラなどの警備システムも全く機能してないだろう……

サトシ「人を呼びに行くか……！？でも……その間に逃げられちゃうかも……」

焦りだけがつのる………が、
ふと、奥の曲がり角から人影が出てきたのが見えた。

サトシ「あ………待てっ！……！」

ほぼ反射的に体が動いた。向こうの人影もサトシに気づいたらしく、走り出した。

間違いない………泥棒だ！

ダダダダダダ………と、夜の美術館を走り回る。

身体能力には自信があったサトシだが、向こうも相当らしい。かなり早く、隙をついて死角に回り込まれてしまう。

サトシ「くっ………こうなったら！ピカチュウ！アイツに10万

……はマズいか。でんじはだ……！」

ピカチュウ「ピカッチュウッ……！」

ビシイ………と、夜の美術館に雷電が迸る………が

「………！！」

ヒョイツ

なんと犯人は、かなり速度があるはずの攻撃を、意図もたやすくか

わしてみせた。

サトシ「なっ……………!?!」

何だアイツ!?!あんなの俺でも難しいっての!

と負けず嫌いの彼は思ってしまう。普通はできないと思うんだけどなあ……………。

サトシ「つくしょー!こうなったら挟み撃ち作戦だ!ピカチュウ!こうそくいどうで前に回り込め!」

ピカチュウ「ピツカア!!」

ビュンツ!と、凄まじいスピードで前へ突っ込むピカチュウ。

???「……………!」

ピカチュウがヤツを追い抜く!

そう思った瞬間、

ドカアッ!と、ピカチュウが不意に何者かに吹き飛ばされる。

サトシ「ピカチュウ!?!」

何とかピカチュウをキャッチするサトシ。幸い大したダメージではないらしく、すぐに地面に飛び降りる。

サトシ「ってアイツは!?!」

慌てて周りを見渡すも、すでに犯人の姿はなかった。

サトシ「くそっ……………!逃げたか!?!」

ルカ（何故人が中に……………！？）

美術館・資料展示室奥。

そこでは先程の犯人…………ルカが何か手元の機器を操っている。
まあいい。任務には大して支障はない……………

カタカタカタカ……………ピピッ！…………カチャッ……………

どうやら保管ケースのロックを解除したようだ。

ギィ……………ケースを開け、中の物を取る。

ルカ（……………こんな物が……………神に近づく鍵になるとはな……………）

ソレをポーチにしまい込み、部屋を出ようと振り返った瞬間、

サトシ「見つけたぞー！」

ルカ「……………」

息を切らしながら、先ほどの少年と黄色いポケモンが入口に立っていた。

サトシ「そのポーチを渡せ！」

ルカ「……………」

何も言わない犯人……………

ん？よく見たらコイツ……………女か？

後ろで一つに束ねてある深い茶色の髪。

身体のアインがくつきり解る、ピチッとした黒い特殊スーツ（？）

みたいなのに身を包んでいる。ほら……………キャツ アイみたいなあの

……………

等と考えていると……………

クルッと、ルカが後ろの窓の方へ向く！

その瞬間！

ビシイ！！と、窓が凍りつく。

ルカ「……………！！」

サトシ「っへ！お前の魂胆なんて見え見えだぜ。窓から逃げようとしたら冷凍ビームで凍らせろって、前もって指示を出したのさ！！」

そう自信満々に叫ぶ少年の傍らにはオニゴーリが君臨している。

サトシ「さあ、もう逃げ場はないぞ泥棒！」

他に窓も無く、出口もひとつしかない。確かに逃げ場はなさそうだが、

ルカ「……………私が他に手をつてないと思うか？」

サトシ「え？」

瞬間、

ピカチュウ「ピカピ！！」

バシィッ!!

サトシ「うわっ!?!」

間一髪、ピカチュウが後ろの気配に気づき、サトシに攻撃を加えられる前にアイアンテールで遮った。

マニョーラ「……………ニユ……………!」

サトシ「マニョーラ!?! ……って、あつ……………!?!」

だがその一瞬の隙について、ルカがサトシとピカチュウとオニゴーリの間を縫うようにすり抜けていった。

サトシ「しま……………! 待てっ!?!」

必死に追うも、既に犯人は入口の手前まで迫っていた。

なんて速さだ……………

ルカが美術館の外へ出る。

が、

????「そこまでだ!?!」

突然、サトシの聞き慣れた声が響いた。入口の方をしてみる。

ルカ「な……………!?!」

タケシ「サトシ! 大丈夫か!?!」

カスミ「ったく、なかなか帰ってこないと思ったら……………やっぱり面倒に巻き込まれてんじゃない!」

ジュンサー「それを返しなさい！あなたを現行犯で逮捕します！」

そこにはタケシ、カスミ、そしてジュンサーら数人が立ちふさがっていた。

ジュンサー「包囲！！」

ズカズカズカ！！

一瞬で数人の警官が犯人の周りを固めた。

ルカ「ぐ……………！？」

サトシ「な……………何で……………？」

一人だけ状況が掴めないサトシ。するとカスミがため息をはきながら説明を始めた。

カスミ「アンタがいつまでたっても帰ってこないから、心配になってアタシ達が探しに行ったら、美術館で倒れてる人を見つけたのよ。んで、ただ事じゃないと思って通報したの。」

サトシ「で、でも携帯繋がらなかったのに……………」

タケシ「確かに美術館の近くでは繋がらなかったが、少し離れれば問題なく通じたんだよ。」

ジュンサー「恐らく何らかの方法を使って、美術館付近にのみ妨害電波を張ったんでしょうね。周りに怪しまれないように。おまけに美術館の警備システムも全てハッキングされちゃ……………。サトシ君が引っ掻き回してくれなかったらきつと取り逃がしてたわ。」

サトシはポカーンとする。

ま、まあとりあえず……………結果オーライってやつ？

ルカ「く……………」
ジュンサー「確保っ！！」

警官達が一斉にルカに飛びかかる！
その瞬間！

ゴォー！！と、

辺りが一瞬で炎の渦に包まれる。

ルカ「！！？」

サトシ「つつつっ！！？」

ジュンサー「キャッ……………」

炎が沈み、サトシ達の視界が回復する……………が、
そこにはもう既にルカの姿はなかった……………

ジュンサー「くっ！逃げられ……………」

そして、その代わりに……………

「……………」

バタバタ……………黒いローブがはためく……………

サトシ「……………」

カスミ「だ……………」

後ろから射し込む満月の光が、そのシルエットをかるうじて浮かび
上がらせる……………

いつの間にか目の前の美術館の屋根の上には、漆黒の人物とポケモ

ンが立っていた……………

タケシ「敵の新手か……………！！にしても……………！！」

タケシは謎の人物の傍らに立つポケモンに目をやる。

ポケモン「……………」

既にブリーダーとしてはトップクラスの実力を持つタケシ。
だからこそ、わかる。

……………あのポケモン……………かなり育てられている……………！！
バックから射し込む月光のおかげでどのポケモンかまでは見分けられなかったが、発せられる雰囲気というか、気配といったものがそれを物語っていた。

ジュンサー「もしものために保険を掛けてたってわけね……………！！こうなったらあなただけでも公務執行妨害で逮捕します！！ウインディ！！」

ウインディ「ガウ！！」

サトシ「ピカチュウ！お前も行け！！」

カスミ「行きなさい！！マイステディ！！」

タケシ「グレッグル！！」

ウインディ、ピカチュウ、スターミー、グレッグルが突撃する。
だが、

????『炎の渦。』

機械じみた、低い声が静かに響く。
その瞬間、

ゴオオ！！と、またもや炎の竜巻がサトシ達を襲う。

サトシ「うわっ！？」

ポケモン達も、その凄まじい熱風の前に成す術もなく立ち止まってしまう。

ゴオオオオ.....燃え盛る炎。

その向こうにたたずむ漆黒の人物を、サトシは何とか視界に入れる。

サトシ「く.....！お前は.....一体.....」

「何者だ！？」と言葉を続けようとするサトシ.....が、

????.....」

ギン.....

サトシ「ウッ.....！？」

ゴオオオ.....

炎の熱気でその姿が揺らいでいる.....

顔は頭からかぶったフードの闇で見えないのだが、何故か一瞬睨まれた気がした。

????.....」

瞬間、

フッ.....と、

漆黒の人物とそのポケモンは.....その場から消えた.....

.....

ジュンサー「あつ……し、しまった!!」
カスミ「逃げられたわね……」

炎は既におさまっており、まるで何事も無かったかの様に、辺りに再び夜の静寂が戻る。

ジュンサー「まだ近くにいてもいいかもしれない!すぐに防衛線を張って!!」

ジュンサーが部下の警官達に指示を送った。
警官達が慌ただしく動いている……

タケシ「何だったんだアイツは……」

そんな中サトシ達はしばらく呆気にとられていた……が、

サトシ「……」

タケシ「……?サトシ……?」

サトシはしばらく美術館の屋根の上を睨んでいた。

……何だ……?何か知らないけど……

サトシ「……めっちゃくちや悔しい。」

タケシ「まあ、逃がしちゃったしな。」

サトシ「それもあるけど……何か……バカにされたって言うか……」

カスミ「は?」

「何言ってるのコイツ?」といった風な顔でサトシを見るカスミ。

サトシ「……後一步の所まで追いつめたのに、後から来た訳わかないヤツに邪魔されて……、で、何もできないまま結局どっちにも逃げられて……………」

何より、あの時一瞬でも怯んでしまったのが悔しい。あの時の自分はまさに、「蛇に睨まれた蛙」状態だった。

サトシ「……………我ながらみっともないぜ……………」。

グ……………と、サトシは拳を握りしめた……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645z/>

ポケモンヒストリー

2011年12月26日21時47分発行